

研究ノート

物語りのお話し

横 家 純 一

はじめに

「小さき物語の群れから」（注1）という論文がある。小菅（こすげ）信子の作品である。何かを直接に論証するわけではないが、イギリスでの入念な聞き取り調査を経た上の、小さなエピソード（青い壺、散歩、工具と工具箱、ナガサキ、“Who is it?”）を語るうちに、戦争のこと、イギリスと日本の関係史のこと、女性と男性のこと、子どもと大人のこと……について深い洞察を届けてくれる。ここでは、それにならって、いくつかの物語りを、ややアラカルト風に、かるーいノリでお話ししてみたい。とはいえ、それぞれの内容は、かなり奥が深いことを、あらかじめお断りしておく。

1. 小川洋子『人質の朗読会』

このフィクションで著者は、ゲリラに拉致され、軟禁中に朗読会を上演し、その後、全員死亡した人たちのことを次のように描く（注2）。

朗読の合間、彼らは実によく笑っている……何でもいいから一つ思い出を書いて、朗読し合おう。今自分たちに必要なのはじっと考えることと、耳を澄ませることだ。しかも考えるのは、いつになったら解放されるのかという未来じゃない。自分の中にしまわれている過去、未来がどうあろうと決して損なわれない過去だ。それをそっと取り出し、掌で温め、言葉の舟にのせる。その舟が立てる水音に耳を澄ませる。

人質たちは、どうして死の恐怖に立ち向かえたのだろうか。著者の答えは、自分の過去を語り合う朗読会の力、となる。それは、「未来がどうあろうと決して損なわれない過去」についての、いや、その過去の経験が、そしてそれを語るときに生まれる充実感（自信といってもよい）のようなものが、人間に与えてくれるパワーなのだろう。「言葉の舟」という比喻は、のちに出てくる、やまだようこの「ことばにしたとたんに「経験」が結晶のようにその場でキラキラ生まれてくる」という表現にも似て、私たちの人生行路を前向きにきりひらく、いわば動力源になっているようすをありありと伝えてもいる。

2. 村松真理子「ダンテの『神曲』の物語」

この論文で著者は、ダンテ・アリギエーリ [1265-1321] の『神曲：地獄篇 煉獄篇 天国篇』（1,4223 行の三行詩）について語りつつ、つぎのような、ブリーモ・レーヴィ（アウシュヴィッツの極限状態を生き抜いた人）の証言を引用する（注3）。

ユダヤ人強制収容所の非人間的な日常の中、ある日突然偶然にもたらされた人間性の回復の試みであるかのように、「わたし」から収容所の仲間であるアルザス出身の青年ジャンに、ダンテのウリッセにまつわる詩行の記憶がたどられ、フランス語におきかえられながら暗唱され、語られ、再現される。ウリッセが意味する「何か」が、「翻訳」の共同作業を通して、レーヴィとジャンのその日の、その瞬間の、希望となり、どうして今そこに自分たちがいるのか、そのような状況におかれているのか、という重い問いへの、救いもしくは答えが希求され、暗示される。ついには「詩」のことばの記憶が、内身の生命をつなぐパンよりも力を持つ、という感動的な証言を、私たちに伝えながら。

「詩」のことばの記憶が、内身の生命をつなぐパンよりも力を持つ」というのは、どういうことだろうか。フィクションと実話の違いはあるが、小川洋子が描いたあの極限状態におけることばの、物語りの力と通ずるものがあるといえる。ここでは、そのようなウリッセの「この世界を知りつくしたいという知の探究の旅」に接近するべく、『神曲』の原文を、村松真理子の文章から引用してみたい（注4）。

Nel mezzo del cammin di nostra vita mi ritrovai per una selva oscura, ch� la diritta via era smarrita.	ひとの世の旅路のなかば、ふと気がつくと、私はますぐな道を見失い、暗い森に迷いこんでいた。
Ahi quanto a dir qual era � cosa dura esta selva selvaggia e aspra e forte che nel pensier rinova la paura!	ああ、その森のすごさ、ごしさ、荒涼ぶりを、語ることはげに難い。思いかえすだけでも、その時の恐ろしさもどってくる！
Tant'� amara che poco � pi� morte; ma per trattar del ben ch'� vi trovai, dir� de l'altre cose ch'� v'ho scorte.	その経験の苦しさは、死にもおさおさ劣らぬが、 <u>そこでめぐりあったよきことを語るために、私は述べよう</u> 、そこで見たほかのことどもをも。

「地獄」や「煉獄」の経験を経てはいるものの、「そこでめぐりあったよきことを語るために、私は述べよう」というウリッセのセリフには、前向きな姿勢がうかがわれるが、それ自体に極限状態を生き延びるためのパワーが秘められているとはいえない。むしろ、ことばの中身・意味ではなく、イタリア語がフランス語に置き換えられていくときの高揚感、そして、

二つの言語を行きつ戻りつするときの、選択の、解釈の、そして表現の、自由な精神の方にパワーの源があるように思える。

3. 牧野あおい『さよならミニスカート【1】』集英社 2018

つぎは、単行本第1巻の帯で、「このまんがに無関心な女子はいても、無関係な女子はいない」と断言する作品について話してみよう。著者は、担任からセクハラをうけ、ひきこもっていた美玖（主人公神山の妹）のセリフとして、次のような表現を残している。

アイドルは、女の子の自分を許してくれるんだ……短いスカートで、堂々とステージに立って、男女問わず笑顔を向けて、どんなときも、何を言われても、「女の子」を崩さなくて……ああ、自分だって、女の子でいいんだ……だから、ありがとう……アイドルになってくれて、ありがとう。

ここには、この妹には、アイドルのフリフリのスカートはかわいいものの代名詞であり、かわいいものを見ると、みんなが元気になるという信念と期待がある。ところがある時、その美玖が、痴漢に太ももを触られた事件がおきると、同級生の沖田がすかさず次のようにいう。

お前らもさー、変質者恐がってるくせに、なんでそんなスカート短けーの？ そんなに怖いなら、スラックス履けよなー。神山さんみたいに。結局さあー、男に媚び売るために履いてんだろ？ スカートなんかさー、そんなの、触られて当たり前……。

これに対して、ミニスカートでアイドル活動をしていたが、今は、スラックス通学している神山仁那は、土足で机の上をダッシュして、沖田をつかまえ、つるし上げながら、「説得力、無ェんだよ。スカートはあんたらみたいな男のために履いてんじゃねえよ」と反駁する。

それは、ミニスカートは男に媚びていて、そのため、男の欲情・暴力を許容・正当化する、という巷にあふれる言説・伝説・ナラティヴへの「さよなら」の宣言である。そしてさらにミニスカートは、「女の子の自分を許してくれ」、「女の子でいいんだ」という、なかなか実現しそうでない理想、いわば神話を創出して、それが、この作品の主題にもなっているのだ。女性の“ありのまま”を肯定すること、そのような社会を設計することを主張していることにもなろう。それは逆に言えば、そのような“ありのまま”を誇ることができにくい世の中への警告でもある。読者は、このような世界観を共有し、消費しているのだろう。

4. 青木幸子『物語が始まるとき』春風社 2014：32-33

ここで著者は、物語り（から物語）がうまれる瞬間に立ち会っている。読者に伝わるのは、

重苦しいカウンセリングが、楽しい出会いに変わっていく模様と、その感動だ。ことばのもつしたたかさ、といえようか。

部屋に入ってきた少年は、私と決して目を合わせようとしなかった。「こんにちは。大野幸子と言います。あなたのお名前を教えてくださいませんか？」（無反応）。その沈黙に耐え切れず私は、思わず訊いてしまった。「松田省吾君、だよな？」。コクンとうなずく。それから急に貧乏ゆすりが始まった。ガタガタいう音に私は動揺した。「省吾君、何年生？」「二年」。小さい声だった。でも、初めて声が聞けてほっとした。彼がしゃべってくれるまで待とう……そう思ったとたん、急に貧乏ゆすりが止まった。

「先生、俺、何が好きかわかる？」。びっくりして、「食べ物？」と訊くと、「ちがう、生き物」と。「犬？ ネコ？ うさぎ？……」「ちがう、ちがう」。困った私に省吾君はこう言った。「俺は蛇が好いとう」「蛇？」。彼は、私の顔を見てにやにや笑い始めた。「蛇のどこが好き？」「ぬるぬるしとうとこ、みんなが気味悪がるとこ、そこが、いいたい」。

そのあと、どんな話をしたのか思い出せない。

どう見ても、成功したカウンセリングの一場面とは思えない。さいごに「どんな話をしたのか思い出せない」とあるように、対話の記録は途中で終わっている。がしかし、この対話は次のセッションで、予想外の展開をみせる……学校でのいじめ、胃がんで亡くなるまでのおばあちゃんの介護、そして母の病気といったやや重いエピソードが立て続けに、しかも、一方的に語られる。このときすでに、カウンセラーが気づかぬままに、カウンセリングは成功している、といっても過言でない。大野（青木）さんをみる省吾君の心を、青木さんはこう記録する。

俺、たまげたけど、この人はおもしろか、今までの人とは違うって思うた。今まで、自分の話ばしてくれる先生は、おらんかったけんね。先生、大判焼きの話するとき、ものすごく嬉しそうやった。俺、こげん、人が嬉しそうに話ばするの、初めて見たような気がして……なんか、ちょっと、嬉しかった。

「人が嬉しそうに話ばするの、初めて見た」というセリフは、逆に、省吾君の日常生活がいかに緊張続きであったかを示すものだ。カウンセラーといえども、そんな機会はめったに訪れないだろう。それが可能だったのは、それまでの蛇の話や、死体洗いのバイト（ここでは省略した）のドキツイおしゃべりが、この対話を深化させていったに違いない。

5. (A) Stephen Greenblatt: Why holyday story matters
 (B) Jenny Erpenbeck : “GO, WENT, GONE”
 (C) Stephanie Saldaña: Where Jesus would spend Christmas

ここでは、ニューヨーク・タイムズ紙から3点(いずれも2017年12月の記事)を取りあげる。まず (A) は、狩猟・採取時代の研究者であるハーバード大学教授を取材した記事で、人類は、ストーリーの語りあいにより、共同作業の基本をつかみ、適応や再生産のための要諦(よい)を身につけた、というものである。物語りの技が上達すればするほど、他者からの協力が得られやすくなり、その結果、それはその集団が成功するのにきわだった貢献をもたらすからだ(outstanding contribution to the group’s overall success)。作り話は、意外にも、たんなる娯楽以上のものということになる(注5)。以下、原文を引用してみる。

How did humans learn cooperative behavior such as food-sharing, the care of others, the coordination of tasks, the acceptance of social norms? The answer, it seems, has everything to do with the stories we tell.

--the best storytellers have better fitness and higher reproductive success.

--skilled storytellers receive increased support from others and are thus rewarded for their outstanding contribution to the group’s overall success.

--A recent study of hunter-gatherers reminds us that our fictions are more than entertainments.

つづく (B) の “GO, WENT, GONE” は、書名である。妻を亡くしたドイツ人もと教授が、家族を失ったアフリカからの難民と出会い、話を聞くにつれて、通常なら老年期に遭遇するはずの孤独や先細りの生活ではなく、逆に、その悲しみをのりこえ、人生の意味や目標を見つけないという内容である(In retirement, he faces not isolation and diminution, but companionship, purpose and a greater capacity to confront his own personal losses and grief)。Claire Messud は次のように書評している。

He befriends men from Burkina Faso, Nigeria, Niger and Ghana--He listens to their stories, and feel obligated to try to help them.

--Rashid, who tells an agonizing account of losing his children in a shipwreck when fleeing war-torn Libya, and of his wife’s subsequent rejection of him.

--In retirement, he faces not isolation and diminution, but companionship, purpose and a greater capacity to confront his own personal losses and grief.

--her novel dares to ask what becomes of identity and morality in the face of our globe’s radical changes.

「Erpenbeck の作品は、地球の激動期の生き方と人間の矜持をわれわれに指し示している」という指摘は、重い、前向きである。ここでわれわれは、人に話を聞くこと（He listens to their stories）が、人の生きる力を引き出すという単純な真実に気づかされる。（C）は、クリスマス・シーズンに、ある難民取材した Saldaña 記者の記事である。その難民は、悪夢にうなされつつ、「なぜ、子供たちが殺されなければならないのか」と記者に問う。

“I don't sleep at night, because with the dreams are nightmares,” he said. “What we saw! Small children getting killed. With an adult, you don't know if they were a good person or a terrorist. But what did a child ever do?”

これを受けて、Saldaña は、「イエス・キリストがいたら、こんな人にこそ、クリスマスの物語を聞かせてあげよう。なぜなら、それは、マリア様とヨセフが村を追放され、見知らぬ土地でイエスを産んだ物語だから」（The Christmas story is their story more than anyone else's. It is a story of displacement, in which Mary and Joseph leave their home and give birth to Jesus in strange city）と答える。一見、クリスマス物語の押し売りで、議論のすり替えのように思えるが、他にどんな回答があるのだろうか。Saldaña 記者のメッセージはまだ続く。

As we live through the largest migration in modern history, Christmas invites us to recognize our story in the millions who have been displaced by tyrants, war and poverty and to see their stories in ours.

「最大級の難民が生まれている現代、暴君たちに、戦争に、そして貧困に、住むところを奪われた何百万の人びとと、クリスマスの物語を共有しよう」

このように、物語の共有（to see their stories in ours）がひらく可能性は大きい。いったん発表されたストーリーは共振し、われわれの生きる知恵と力を創出するからだ。そうすると、どうしようもない絶望の中にも、われわれは希望を見いだすことができるのかもしれない。

6. やまだようこ「三つのところ——ライフストーリー研究の源泉」

ここには、ライフストーリー研究の視点から、経験とその語りについての、超一級の見識がある（注6）。

ことばはフシギである。ことばにする前に「経験」があるのではなく、ことばにしたとたんに「経験」が結晶のようにその場でキラキラ生まれてくる。そして、その「経験」を舌の先で転がしながら身体になじませ腑におちるまで語り直しているうちに、しっ

かり自分の「経験」となって定着して、やがては自分の未来の「経験」をつくっていくように方向づけさえするのである。自分と他者のことばが共鳴しあって、水琴窟のような良い音色で響き合ったときのよろこびは、また格別である。

通常解釈では、経験があつてはじめてそれを記録することばが生まれるのだが、著者はそれをひっくり返し、「ことばにしたとたんに「経験」が結晶のようにその場でキラキラ生まれてくる」という。つまり、ことばなくしては、本当の経験は生まれないというのである。いや、ことばそのものが、経験なのかもしれない。本稿の視点にひきつけてみれば、人間の生活は、物語りがあってこそ成立するということになる。

おわりに

大澤真幸（まさち）という社会学者がいる。かつて、つぎのような柳田國男の民話を題材にしたことがある（注7）。

土淵村栃内の久保の観音は馬頭観音である。其像を近所の子供等が持ち出して、前阪で投げ転ばしたり、又櫓にして乗ったりして遊んで居たのを、別当殿が出て行って咎めると、直ぐに其晩から別当殿が病んだ。巫女に聞いて見たところが、折角観音様が子供等と面白く遊んで居たのを、お節介をしたのが御気に障ったというので、詫び言をしてやっと病気がよくなった。此話をした人は村の新田鶴松という爺で、其時の子供の中の一人である。

ここから、著者の深遠な解釈がはじまる。

病という兆候は、次のことを意味しているだろう。子供たちと同様に、別当自身も、身体の水準では、「観音さまも楽しく遊びたいはずだ」、つまり「観音さまと親しく関わっても良いはずだ」ということを知っているのである。しかし、馬頭観音と遊ぶ子供たちを叱りとばしているとき、彼の言葉は、この身体の水準を裏切っていることになる。身体的な水準で見ていたものを、言語的な水準——言語において記載される水準——で見るができなかったのである。身体がすでに見ていたものを言語の方が否定したことに対する、身体の反作用として、兆候（病）が現象することになるわけだ。

ここでいう「身体」とは、言い換えると、人の心、本能、欲、自然、自由であるのに対して、「言語」とは、それらをコントロールする規範、倫理、道徳、教育のことであろう。つまり、本来そなわっている自由が、あとから作り出された規範に抑え込まれたわけである。この時、その本来性に気づいた巫女（いたこ）の役割を、われわれ社会学研究者が担うべきである、

というのが著者の主張である。と同時に、規範・道徳をつかさどる「言語」に対し、人間の自由・自然を体現する「身体」を持ち出し、「身体がすでに見ていたものを言語の方が否定した」という緊張関係の中で、より深い社会認識をえようとしているのだ。本稿の枠組みからすれば、物語りや物語は、ふしぎなことに、「言語」よりもむしろ「身体」に近い。それは、物語りが頭で考えられた言語としてではなく、身体のかげとして立ち現われているからにほかならない。

(注1) 宮本久雄・金泰昌(きむ・てえちゃん)『シリーズ物語り論1：他者との出会い』東大出版 2007:351。

ここに登場する論考のタイトルを討論を除きすべて引用しておく。著者たちの物語り論のひろがりが見えてくるはずである。

- 1：はじめに——落語（はなし）・他者創生の機微
- 2：物語り論の可能性
- 3：病いが語る生の姿
- 4：記述すること・語ること
- 5：キリスト教美術における俗と聖との境界線の曖昧さ——古代末期の教会堂モザイク壁画を諸事例として
- 6：『あいぬ』物語の躍動
- 7：私の詩・表現と琉球弧の文化
- 8：他者とことば——根源への回帰
- 9：苦難と他者の物語地平——「ヨブ記」の生成・転法的物語論的解釈から
- 10：ベートーヴェン・その愛と運命のロンド
- 11：羽根を交わす蝶たち——李良枝の物語における異邦人感覚が向かうところ
- 12：小さき物語の群れから
- 13：おわりに——四つの電話会談

(注2) 小川洋子『人質の朗読会』中央公論新社 2011:10。

(注3) 宮本久雄・金泰昌『シリーズ物語り論2：原初のことば』東大出版 2007：220。ここでも、討論を除くすべてのタイトルを引用しておく。

- 1：はじめに
- 2：〈クセニア〉と〈ノストス〉の叙事詩『オデュッセイア』
- 3：「アブラハム物語」の現代的地平——自同性の超克・脱在（ハーヤー）と自他論の物語へ
- 4：喪のための場 あるいは 物語への抵抗——教父ニュッサのグレゴリオス著『モーセの生涯』を中心に
- 5：物語論から見た黙示文学
- 6：「ユートピア論」再考——エンゲルス、モア、カンパネッラ
- 7：ダンテの『神曲』の物語
- 8：ヨブ記の四つのアイロニー
- 9：「悪人」の物語——南北朝正閏問題と足利尊氏「逆臣」論の帰趨

10：物語としての科学——“Science as a Story-Telling”

11：おわりに——原初のことばについての語り合い

そしてつづく、『シリーズ物語り論3：彼方からの声』には、次のような論考が収められている。

1：はじめに

2：「イアーゴの庭」——物語と世俗的時空の産出

3：『ドン・キホーテ』の語り手たち

4：復生の文学——ハンセン病療養所の文藝作品を手引きとして

5：「もう一つのこの世」に向かって——石牟礼文学におけるポロシオ（隣人）の玄郷（くに）と近代

6：英雄——知とその逸脱

7：物語享受の可能性——生命論的妄想論に依拠して

8：カンブリア紀の爆発——生物進化の物語

9：物語と儀礼——李清俊の『白衣』に描かれる朝鮮戦争の記憶と和解への試み

10：自己物語から他者物語へ——ナラティブ・トランスポジション

11：語り直す力——星野道夫の物語に呼応して

12：女たちの場所から語る——物語の解放

13：おわりに——清夜鼎談：今何故彼方からの声なのか

このシリーズは、古今東西の物語り論の集大成ともいえるが、さらにそこには、それぞれの発題をうけて心ゆくまでかわされる「総合討論」が6点、「発展協議」が3点編集されている。コーディネーターの宮本久雄・金泰昌両氏の尽力と熱意のたまものといえよう。

（注4）宮本久雄・金泰昌『シリーズ物語り論2：原初のことば』東大出版 2007:198。

（注5）ただし、最近の研究では、コミュニケーション技術の発達で、そのまま、物語の共有・創出の可能性を高めたとは言いきれないという。たとえば、ましこ・ひでのりは、コンピュータ社会に対して、「時間・空間に拘束されない魔法のような利便性で、ヒトは格段にユトリを獲得し人生の密度をあげ幸福になれたのでしょうか？」という懐疑的な姿勢を呈している。ましこ・ひでのり『アンチウイルスソフトとしての社会学—アタマとココロの健康のために II』三元社 2020：83。

（注6）桜井厚・小林多寿子『ライフストーリー・インタビュー』せりか書房 2005:57。やまだようこの物語論の蓄積も見逃すことができない。既刊の2点を、タイトルのみ示しておきたい。

『やまだようこ著作集第1巻 ことばの前のことば うたうコミュニケーション』新曜社 2010。

『やまだようこ著作集第8巻 喪失の語り 生成のライフストーリー』新曜社 2007。

（注7）大澤真幸『21世紀学問のすすめ3 社会学のすすめ』岩波書店 1996：4-7。

